

2021年度 発達科学研究所オンライン講演会報告

「音楽づくり」の魅力と楽しさとは
—松井孝夫先生と共に考える—

日時：2021年11月21日(日) 10:00~12:30

講師 松井孝夫先生 (作曲家・聖徳大学音楽学部准教授)

松本晴子¹

2021年度はコロナウイルスが少しずつ収束の途を辿ってきているものの楽観できない状況が続いていたことから、2020年度に続きオンラインによる発達科学研究所講演会の開催となった。休憩時には、本学音楽リエゾンセンターと連携し認定演奏員佐々木舞さんによるフルートの演奏（松井孝夫先生作曲《マイバラード》などを含むプログラム）を配信した。

一般参加者と教育学科、日本文学科などの学生の参加によって約150名が有意義な時間を過ごした。松井孝夫先生の講演内容の概要を以下に報告する。

Keywords : マイバラード、松井孝夫、発達に応じた音楽づくり

「楽しい！かっこいい！自分なりの音楽を紡ぐ」という講演タイトルを松井孝夫先生（以下松井先生）がご提示くださり講演がスタートした。松井先生は作曲家、教育者としてご活躍されており、100曲以上の合唱曲を作曲している。これらの合唱曲は、近年小学校の教科書にも掲載されるようになってきているが、主に中学・高校の教科書と合唱曲集にかならず掲載されてきた。

講演に先立ち、松井先生のルーツと御自身が音楽の道に進むことになったきっかけについてお話くださった。東京都台東区浅草のご出身で3人兄妹の末っ子として育ち、好奇心旺盛なやんちゃな少年だった。小3~小5くらいまではピアノを習っていたが、習っていたのは女の子ばかりで後ろめたい気持ちと恥ずかしさで積極的に取り組むことはなかった。音楽は好きで学校で習ったリコーダーをしょっちゅう家で吹いて楽しんでた。

最初の音楽づくりは、飼っていたセキセイインコのピーコちゃんが死んでしまい悲しかったとき

に、リコーダーで曲を作ったことである。他には好きなお相撲さんが引退した時もリコーダーで曲を作ったりした。中学時代は吹奏楽部でクラリネットを吹いていたが、誕生日が来るたびに母親にねだって楽器を買ってもらい中1ではギター、中2ではバイオリンを手にした。

ある時、NHK教育テレビ「バイオリンのおけいこ」と「ギターを弾こう」の番組でオーディションがあることを知り挑戦したところギターは落ちたもののバイオリンは合格し、中3の1年間「バイオリンのおけいこ」の番組に出演する機会を得た。その時のバイオリンの先生であった外山滋先生がグアルネリという素晴らしいバイオリンで3分間から5分間くらいの短い曲を毎回演奏してくださり、間近で聴くことで音楽の素晴らしさを知り音楽の道に進みたいと強く思うようになった。

作曲に本腰を入れて勉強したのは高校2年ぐらいからで大学は教育学部の作曲専攻で学んだ。高3から大学時代にかけてポップサークルという肢体不自由の方を支援する地域のボランティア活動を始めた。そのボランティアサークルのテーマソ

1. 宮城学院女子大学非常勤講師

ングを作ろうということになり、障害を持つ人も持たない健常者も一緒に心を合わせて歌を歌おうというコンセプトのもとに、詩とメロディーが同時に生まれて《ポッポのバラード》を作曲した。その後、題名の《ポッポのバラード》には違和感があったので《マイバラード》に替えた。

大学卒業後は中学校の教員となった。公開研究授業を実践したときに生徒が発声練習として《マイバラード》を歌ったところ、素敵な曲と評判になり混声三部合唱に直して『教育音楽』の付録に投稿すると良いという助言を受けた。投稿したところどんどん日本全国に広がっていった。

「みんなで歌おうよ、心をひとつにして、はずかしがらず歌おうよ～」という歌詞で始まる《マイバラード》の曲が誕生することになった貴重なエピソードを知ることができた。

次に「楽しい！ かつこい！ 自分なりの音楽を紡ぐ」という本題に入るにあたり、自分の幼少期の頃の気持ちを思い出してほしい、自問自答してほしいと話された。松井先生は母親が歌う童謡、子守歌、兄と姉が聞いていたレコードの音楽がいまだに耳に残り心に響いているとのことだった。

保育園、幼稚園、小学校では、どのようにして音楽と出会う機会を作るか、音楽を愛好する心情を育てていくのか、子どもが音楽を楽しんでいるときはどんなときかを考えてみるのが大切である。楽しい・かつこい・憧れるというホップ・ステップ・ジャンプの3段階の一連の流れこそが音楽づくりに繋がっていく。良いな、楽しいな、カッコイイな、自分もやってみたいなと憧れる。それに近付こうとして自分なりに音楽を紡ごうとする、そこが音楽づくりにつながるのではないか。自分なりの音楽を紡ぐとは、自分にとって良い音楽を見つけるということ、音に夢中になって探求していく、押し付けにはならないこと。これは良い音楽だから聴いた方がいいよ、聴きなさいという押し付けではなく子どもが自ら夢中になれるものを見つけて探究していく。そうできるように仕向ける。教師は子どもが自分なりの音楽を作っていく楽しさを味わえる機会を作る必要がある。

テレビの流行歌も捨てがたい音だけれども、やはり身近な親とか兄弟から吸収したものは自分の身となる。令和の子どもたちはどうかというと、スマホでみるYouTubeやテレビの音楽番組などから聴取するもの、ゲーム機の音などいろいろなところで音楽を耳にする。

保育園、幼稚園、小学校では、生活の中の音楽ということで音楽の授業はもとより、行事とか生活の環境音（掃除の時に流れる音楽、下校の時に流れる音楽など）としてたくさんの音を享受している。子どもが楽しいと思うときはどんなときか、無意識に素敵だなどと思う曲を自分で口ずさんでいたり、知らない間に歌を覚えて歌っていたり、それが気付けばお気に入りの歌になっていたりする。

楽しいことをやっているときに流れている音楽はとても心に残る。たとえばダンスの音楽、バスケットボールやスケボーの音楽とか楽しい気分と合わせて音楽が流れていたりする。ここでの楽しさとは音楽が耳から入って、それが自分の心に響いて音楽が定着していくことである。

次に発達段階に応じた音楽作りについて (1) 保育園、幼稚園、小学校低学年、(2) 小学校中学年、(3) 小学校高学年の順に述べる。

(1) 保育園、幼稚園、小学校の低学年だったらどんなことをやったらいいのか、基本的なところを振り返ってみると2つのポイントが考えられる。第1にまねっこリズム、模倣のリズム、リズムを身につけるということである。コール&レスポンス。「みなさん」と呼びかけたら「なんですか」と答える、「こんなことができますか」「こんなことができますよ」など一人が問いかけてみんなが答えるというのを繰り返し行い楽しむ。

第2にハンドサイン。ハンドサインで音の感覚を小さいうちから身につけていくと見えない音を感じるようになるのではないだろうか。ハンガリーのコダーイ・メソッドハンドはハンドサインを中心に移動ド唱法で音楽を教えていくシステムだが、日本ではやっているところは少ない。

(2) 小学校中学年（小3、小4）は、鍵盤がはずせるミニグロックンを用いて音を組み立てる。

例えば、ドレミソラドのヨナ抜き音階はどこをたたいてもそれなりの音楽に聞こえるので即興的でたたかせる。拍にのって一人ずつ1小節分、4分の4拍子だったら、「ドドミソ、ウン（休符）」とたたいたらみんなが「ドドミソ、ウン」とたたく。次に別の人が「ソソミド、ウン」とたたいたらみんなでも同時にたたく。その繰り返して拍の流れに乗るなかで即興演奏をする。このようなことを3年、4年生くらいでは繰り返し繰り返し、常時活動のような感じでしょっちゅうやっていると即興で音楽を作ることが身に付いていく。その時の教室での座りかたに配慮が必要で、円の形に座らせてお互いに向き合ってやるというような教室配置も大事な要素になってくる。それが慣れてきたところで今度は三、四人の小グループを組織して各自の作った音楽を1小節作ったものをつなげて1つのまとまった作品にする。

一般的にどうしてもできあがった楽曲を演奏することが音楽という風にとらえられがちだが、あくまでもそれは西洋音楽としての楽曲中心主義である。本来音楽は、行為としての音楽、「こと」としての音楽であり、すでにあるものを演奏するのではなくて自分で音楽を即興で作っていく、音を試してみる、音を探してみる、その中で自分が良いなという音楽を見つける。音楽は人に伝えるだけではなく、自分の中で探究して、人はどう思うかはわからないけれども自分はこれが良いなと思えるような音楽を作り上げていくことを小学校の中学年くらいまでには経験できるよう大事に取り扱うのが良いのではないかと考える。

なお幼児期から小学校中学年くらいまでは、大勢で合わせてやることは難しいので、人と合わせるよりも自分でいろいろ音を探求するような場を作る、個人探究の方が小さい子どもは慣れているし、取り組みやすい。

(3) 小学校高学年は、楽曲としての音楽、「こと」の音楽から一歩進んで「もの」としての音楽を作ることができるようになっていく。考案したメソッドを紹介する。

①最初に五七五の俳句を2句作り4小節4小節

で8小節のメロディーを作る。メロディーを作るということは子どもにとってとてもハードルの高いことであるが、身近なことを俳句にし、それをメロディーにする。

メロディーを作るにあたっては、次の4つを示している。

- ① ドレミファコース…ドレミファソラシドの音を使って曲を書く
- ② 沖縄コース（沖縄音階）…ドミファソシドの音を使って曲を書く
- ③ 民謡コース（民謡音階）…ファソラドレの音を使って曲を書く
- ④ 童謡コース（ヨナ抜き音階）…ドレミソラドの音を使って曲を書く

手順1：「8小節のリズムにメロディーをつけよう」

リズムはあらかじめ固定して指定する。これは自分がこういうリズムで作りたいと思っても子どもはそれをなかなか音符に表せないからである。教師が指定したリズムを全員でたたく。

このリズムをたたけるようになったら手順2に進む。

手順2：「お題からイメージを膨らませて俳句を2句作り、文字は平仮名で書いてみよう」

「夏の思い出」、「秋」など身近なお題を示す。

「夏の思い出」という題で俳句を2つ書いてみた例である。

- ・「すなはまで めかくしをして すいかわり」
- ・「なつまつり うちあげはなび そらにまう」

この俳句を教師が提示するリズムでたたきながら言葉を発してみる。すなはまでウン めかくしをしてウンウン すいかわり」のよう言葉とリズムを作る。

手順3：「星座図を書いてみよう」

曲を書くときは言葉の抑揚、イントネーションにできるだけ忠実にメロディーを書く必要があるため、線と点の星座図のような感じでイントネーションを何度も考えながら言葉の上に星座図をかいてみる。

手順4：「4つの音階をリコーダーか鍵盤ハーモニ

カで演奏してみよう」

上記の4つの音階を繰り返し演奏して、雰囲気
が馴染んでから、どれかを1つ選ぶ。

手順5:「メロディーをつけてみよう」

リズムとことばが決まり、音階を選んだところ
でメロディーを作る。最初の4小節のところは次
に続く感じのメロディーにすること、最後は曲が
終わった感じにすることを伝える。あまり例を教
えると影響されてしまうことから、終わりの音に
ついてのみ助言する。4小節目の終わりは①コー
スを選んだらレかソにする、②コースを選んだら
ミかソにする、③コースを選んだらソカラにする。
8小節目の終わりは③コースはレで終わる。①②
④の終わりはドで終わるなど条件を少し伝えてい
く。ただし、ここをもっとのぼしたいとか、ここ
のリズムを変えたいとかあった場合は、様子によ
って許容する。ルールを破るところに曲作りの
醍醐味があるので、最低制限は決めるが、子ども
たちの創造性、もっとこんなことがやりたいなど
はなるべく取り入れる。曲作りはペアで行ったり
することが多いので、8小節の曲ができれば、
二人で歌う、もしくは一人が楽器を演奏して一人
が歌うという形で発表する。

運動会、修学旅行、遠足などの学校行事や自分
たちの日常のさまざまな出来事をテーマとして俳
句を書き、それを音楽に落とし込めるようにして
8小節のメロディーを作る。

最近是和音にのせてメロディーを作るものが教
科書に散見されるけれども、俳句からというシン
プルなアナログな感じの曲作りという形も子ども
たちの歌心を引き出すという意味では、歌ってみ
て歌いやすい音楽を作るということではアナログ
もバカにはできないと思う。今は、プログラミング
とかICTを活用した曲作りをやっている人も多
いが、アナログで子どもの感性、創造性を育てる
ことも良いのではないかと考えている。

以上発達段階に応じた音楽づくりについてみて
きたが、保育園や幼稚園、小学校の低学年から中
学年にかけては、「こと」としての音楽を大事に
育てていくのが良いのではないだろうか。この時

期は個人的な探究活動が得意なので無理に合わせて
やるとするのはなかなかそぐわないように思う。
素朴な音との出会いと向き合うことによって、歌
心、音楽への興味関心が膨らんでいくのではない
だろうか。中学年から高学年は、何を学んでいく
かということになるが、低学年の場合は遊びの中
でいかに学びを見つけていくかがポイントではな
いかと考える。

最後にホップ・ステップ・ジャンプで音楽づく
りにチャレンジすることについて改めて問い直し
たい。楽しいと思うにはどうしたらいいのか、自
分の楽しかった音楽の思い出を1回振り返ってみ
て、子どもが音楽を楽しむにはどうしたらいいか、
次にかっこいいと思わせるにはどうしたらいいか、
自分なりの音楽を紡いでいくにはどうしたらいい
か、それにはこのホップ・ステップ・ジャンプの
3段階で音楽づくりにチャレンジしていくことでは
ないかと考えている。

質疑応答から抜粋:

質問1 リズムを提示することの大切さについて

松井先生:ある程度スモールステップで1つ1
つやっついていかないと音楽づくりは難しい。子ども
は楽譜を書くのが苦手なので、かっこいいリズム
とか音楽が浮かんでもどうやって表したらいいか
四苦八苦してしまう。そういう子どもをみて、リ
ズムは固定したものをを用いるようにしながらその
なかで子どもができることを見つけていくような
形で音楽づくりに取組む方法を考案し実践してき
た。

質問2 松井先生が作曲するにあたっての曲づ
くりと構築方法について

松井先生:《マイバラード》のようにみんなで
歌おうというコンセプトがある場合は詩とメロ
ディーが同時に生まれる。こういう曲はすごく自
然なので受け入れられやすい。詩とメロディーが
両方同時に生まれる曲もあるが、ほとんどは思い
が先行するので詩が先で詩のイントネーション、

言葉の語感を大事に作っていくとメロディーになる。コード進行はピアノに向かっていろいろ弾いて和音進行を駆使していろんなタイプの音楽を作りたいという思いで音楽を構築するようにしている。

質問3 合唱をする際、心を一つにすること以外で大切にしなければいけないこと

松井先生：歌に真摯に取り組むこと。結果ではなく過程でいかに協力してやるかということ。大勢でやるというよりも一人ひとりが意味を持って参加する。なんとなくその他大勢の中の一人というよりも一人ひとり音楽を作る一員であるということに自覚する。みんなでやることなのだけれども一人ひとりが大事であることを心に持つことと考えている。

以上、全体を通して、松井先生の優しさと温かさが伝わってくる講演であった。

内容を総括すると「音楽づくり」を行うにあたって音楽指導者（教師）にとって大切なことは、次の3点に集約される。

第一に子どもが音楽を作っていく楽しさを味わえる機会を発達段階に応じて設定する。

第二に子どもが曲をつくりたいという思いを大切に、否定することなく子どもに寄り添った指導をスタンスとする。

第三に子どもが自分にとって良い音楽を夢中になって探求し音を組み立て、できあがった曲を歌ったり楽器で表現したりすることの喜びを味わえる方法を工夫する。

これらは音楽指導者（教師）自らが音楽に素直に向き合い子どもと共に共感し、喜びや感動を共有することが前提となる。

